

## 看護科学生の子どもに対するイメージとそれに影響する要因（第3報）

阿部 裕美<sup>1</sup>, 日野 照子<sup>1</sup>, 岸本 光代<sup>2</sup>, 谷原 政江<sup>1</sup>

### The Images of Children Held by Nursing Students and The Factors Influencing Them (Part 3)

Hiromi ABE<sup>1</sup>, Akiko HINO<sup>1</sup>, Mitsuyo KISHIMOTO<sup>2</sup> and Masae TANIHARA<sup>1</sup>

キーワード：子ども，学生，イメージ，影響要因

#### 概 要

A短期大学看護科1，2，3年生を対象に，SD法による43項目の子どもに対するイメージとそれに影響する要因を調査した。43項目の質問に対する回答について因子分析を行った結果，第一因子「生き生き」，第二因子「性質」，第三因子「たくましさ」と解釈できる3因子により構成されていた。

因子別平均得点でみて，3因子はいずれも肯定的な側にあり，「生き生き」に関する因子は，他の2因子に比較して肯定度が有意に高かった ( $p < 0.001$ )。

学生の子どもイメージに及ぼす要因として，3年生は「性質」と「たくましさ」に関する因子に肯定度が有意に高くなっていた ( $p < 0.001$ )。これは小児看護学臨地実習において子どもと深く関わることで成長発達の途上にある子どもの特徴を理解し，内面的特性や個別的な側面を捉えることができたことによるものである。

また，子どもの世話への関心がある者は3因子すべてにおいて肯定度が有意に高かった ( $p < 0.001$ )。さらに，子どもが嫌い，どちらかという嫌いと答えた学生が6.4%いた。これらの学生に対して，ロールプレイングを取り入れて疑似体験を行うことは，子どもの世話への関心を持たせ，苦手意識の克服やコミュニケーション能力を高めることができる有効な教育方法と考える。

#### 1. はじめに

近年，出生数の減少により少子化が進み，2006年の世帯構造によると，核家族世帯は59.0%を占めている<sup>1)</sup>。それにより，核家族化の時代に育った学生は，きょうだい数も減少し，子どもの遊びにおいてコンピューターゲーム，ビデオ，テレビなど家の中で一人で楽しめる遊びが増えてきた。一方，地域のなかで子ども同士，特に同年代以外の子どもとの遊びは減少している。看護を志す学生においても，特に乳幼児との接触体験は希薄であり，身近に子どもに接して世話をする機会は少なく，日常生活のなかで子ども本来の姿を理解することが困難になってきている。

既報においては，子どもとの接触体験，子どもの世

話への関心，きょうだいの存在などが学生の子どもに対するイメージ形成に影響を及ぼすことを報告した。

また，学生の子どもに対するイメージは小児看護学臨地実習の取り組みに反映することを指摘している<sup>2,3)</sup>。

最近では，特に小児看護学臨地実習において，子どもとどのように接したらよいかわからず，苦手意識や不安を抱いたり，コミュニケーションに困難を感じている学生が多くなってきた。そのため，再度その実態とイメージに及ぼす諸要因の影響を明らかにし，教育についての若干の示唆が得られたので報告する。

#### 2. 研究方法

##### 1) 調査対象および調査期間

A短期大学看護科3年課程の学生3年生73名，2年生119名，1年生122名，計314名を対象とした。3年生と2年生は3月，1年生は4月に調査を行った。有効回答は計313名（有効回答率99.7%）から得られた。

##### 2) 調査内容と方法

子どものイメージについては，Osgood, C. E<sup>4)</sup>による

(平成20年10月15日受理)

<sup>1)</sup>川崎医療短期大学 看護科，<sup>2)</sup>川崎医療短期大学 臨床検査科

<sup>1)</sup>Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>2)</sup>Department of Medical Technology, Kawasaki College of Allied Health Professions

Semantic Differential Method (SD 法) をもとに既報<sup>3)</sup>に用いた43項目の対をなす肯定的表現と否定的表現の質問について5段階の評定尺度を設け、肯定的なイメージが強いものを5点、否定的なイメージが強いものを1点として、その尺度得点を求めた。また、年齢、家族形態、きょうだい数、子どもの好き嫌い、接した子どもとの関係、子どもと親しく接する機会の頻度、子どもの世話に対する関心度など、無記名による質問紙調査を行った。

### 3) 分析方法

子どもに対するイメージ43項目については、主因子法・プロマックス回転法による因子分析を行った。さらに抽出したイメージ因子別得点を算出した。各因子得点間の関連性についてはPearsonの相関係数を用いた。また因子間の有意差検定にはFriedman検定およびWilcoxonの符号付順位検定を用いた。子どもに対するイメージに及ぼす諸因子の影響については重回帰分析を行った。すべての検定において、有意水準は1%未満とした。

データ解析には、SPSS15.0 J for Windowsを用いた。

### 4) 倫理的配慮

調査対象者に対しては文章と口頭により研究目的および研究内容、学生氏名は無記名であり、質問紙調査であることを説明した。また、成績評価には一切関係しないこと、研究への協力は本人の自由意志であり、協力しない場合でも不利益は生じないこと、さらに、調査結果は統計的に処理され個人が特定されないことを説明し協力を得た。

## 3. 結果

### 1) 子どもに対するイメージの構造

子どもに対するイメージ尺度43項目を用いて、主因子法・プロマックス回転による因子分析を実施した結果、3因子が抽出された。次いで、共通性が低く、因子負荷量が0.4以下を示した15項目を除外し、再度同因子分析を行った。2回目の分析においては、Q32「すばやい」が第三因子に因子負荷量0.379を示したが、因子負荷量が0.35以上であるため除外しないと判断した(表1)。結果として、3因子からなる28項目が子どもに対するイメージ尺度の質問項目として選択された。3因子は以下のように解釈した。

第一因子は、「活発」「おしゃべり」「生き生きしている」「意欲的」「元気がある」「楽しそう」などの9項目

表1 子どもに関する各質問の因子負荷量

		n=313		
項目内容		因子1	因子2	因子3
<b>第一因子 生き生き (<math>\alpha=0.69</math>)</b>				
Q31:	活発	<b>0.654</b>	-0.020	0.111
Q11:	おしゃべり	<b>0.613</b>	-0.136	0.077
Q35:	生き生きしている	<b>0.583</b>	0.102	0.070
Q16:	意欲的	<b>0.529</b>	-0.054	0.156
Q24:	元気がある	<b>0.527</b>	-0.027	0.092
Q27:	楽しそう	<b>0.514</b>	0.187	0.129
Q15:	落ち着きがない	<b>-0.509</b>	0.272	0.189
Q1:	明るい	<b>0.449</b>	0.021	0.049
Q25:	幸福そう	<b>0.440</b>	0.251	-0.080
<b>第二因子 性質 (<math>\alpha=0.79</math>)</b>				
Q23:	清潔	-0.275	<b>0.620</b>	0.172
Q29:	きれい	-0.152	<b>0.577</b>	0.157
Q30:	甘い	0.085	<b>0.536</b>	-0.151
Q39:	正直	0.129	<b>0.523</b>	-0.061
Q28:	良い	0.052	<b>0.469</b>	0.099
Q41:	丸い	0.186	<b>0.456</b>	-0.258
Q36:	のんびりしている	0.136	<b>0.445</b>	-0.239
Q40:	純粹	0.311	<b>0.425</b>	-0.083
Q43:	あわれみ深い	-0.148	<b>0.409</b>	0.035
Q37:	あたたかい	0.392	<b>0.403</b>	-0.018
Q7:	気持ちが良い	-0.012	<b>0.400</b>	0.065
<b>第三因子 たくましさ (<math>\alpha=0.75</math>)</b>				
Q9:	たくましい	0.103	-0.044	<b>0.656</b>
Q8:	頼もしい	-0.156	0.042	<b>0.626</b>
Q18:	強い	0.199	-0.109	<b>0.604</b>
Q19:	勇敢	0.171	-0.124	<b>0.460</b>
Q14:	責任感が強い	-0.276	0.198	<b>0.439</b>
Q6:	鋭い	0.174	-0.021	<b>0.421</b>
Q22:	思いやりがある	0.180	0.279	<b>0.411</b>
Q32:	すばやい	0.238	-0.015	<b>0.379</b>
固有値		6.010	2.79	2.18
寄与率 (%)		21.46	9.96	7.77
累積寄与率 (%)		21.46	31.42	39.19

主因子法 プロマックス回転

で構成されていた。この因子は、子どものもつ生き生きとした気力や活気などの活発なイメージに関連しているため「生き生き」と解釈した。

第二因子は、「清潔」「きれい」「甘い」「正直」「良い」「丸い」「のんびりしている」「純粹」などの11項目で構成されていた。この因子は、子どものもつ資質や外観的な姿に関連しているため「性質」と解釈した。

第三因子は、「たくましい」「頼もしい」「強い」「勇敢」「責任感が強い」などの8項目で構成されていた。この因子は、子どものもつ勢いや力強さに満ちている内面的イメージに関連しているため「たくましさ」と解釈した。

データの構造についての信頼性(内的整合性)は、Cronbachの $\alpha$ 係数が質問全体:0.84, 第一因子:0.69, 第二因子:0.79, 第三因子:0.75で、いずれも

内的整合性の基準とされる0.70に近い数値かそれ以上を示した。

子どものイメージ尺度の3つの下位尺度に相当する項目を用いて尺度得点を算出し、各尺度得点の平均値、標準偏差を表2に示した。全被験者でみて、いずれのイメージの平均得点も肯定的な側にあり、「生き生き」のイメージの肯定度は最も高く、他の2因子に比較して肯定度が有意に高かった。

表2 子どもに対する因子別下位尺度得点

	平均値±標準偏差
生き生き	4.158 ± 0.40
性質	3.768 ± 0.48
たくましさ	3.197 ± 0.59
p<0.01                      n=313	

また、「生き生き」、「性質」、「たくましさ」それぞれの下位尺度得点間の関連性を検討した。その結果、「生き生き」と「性質」の下位尺度得点との Pearson 相関係数は  $r = 0.512$  ( $p < 0.001$ )、「生き生き」と「たくましさ」の下位尺度得点との Pearson 相関係数は  $r = 0.364$  ( $p < 0.001$ )、「性質」と「たくましさ」の下位尺度得点との Pearson 相関係数は  $r = 0.259$  ( $p < 0.001$ ) であり、それぞれ有意な正の相関が示された。さらに Friedman 検定を行った結果、3者間に有意な差が認められた ( $\chi^2 = 369.70$ ,  $p < 0.001$ )。そこで、どの下位尺度得点間において有意差が認められるかを調べるため、Wilcoxon の符号付順位検定を行った。その結果、すべての項目間において有意差が認められた ( $p < 0.001$ )。

## 2) 学生の子どもに対するイメージに及ぼす諸要因の影響

「生き生き」、「性質」、「たくましさ」それぞれの下位尺度得点を従属変数とし、学年、子どもと親しく接した機会、子どもの世話への関心、子どもの好き嫌い、弟の存在、妹の存在の6項目を独立変数として投入した重回帰分析を行った。

その結果、「生き生き」の下位尺度得点に影響を与える要因として、子どもの世話に関心がある ( $\beta = 0.233$ ,  $p < 0.001$ ) の1項目が抽出された(表3)。

「性質」の下位尺度得点に影響を与える要因として、子どもの世話に関心がある ( $\beta = 0.261$ ,  $p < 0.001$ )、3年生 ( $\beta = 0.154$ ,  $p = 0.016$ ) の2項目が抽出された(表4)。

「たくましさ」の下位尺度得点に影響を与える要因

表3 「生き生き」の下位尺度得点と関連要因による重回帰分析

要因	標準化係数 $\beta$	t 値	p 値
学年 (1年生)			
2年生	0.045	0.675	0.500
3年生	0.059	0.906	0.366
子どもと親しく接した機会 (なし)			
ほとんど毎日	0.046	0.719	0.473
ときどき	0.074	1.070	0.285
ほとんどない	-0.028	-0.419	0.676
子どもの世話への関心 (どちらともいえない)			
ある	0.233	3.378	0.001
ない	0.075	1.136	0.257
子どもの好き嫌い(嫌い)	-0.050	-0.687	0.492
弟の存在 (無)	0.086	1.436	0.151
妹の存在 (無)	0.038	0.643	0.521

( ) 内はレファレンスカテゴリ

表4 「性質」の下位尺度得点と関連要因による重回帰分析

要因	標準化係数 $\beta$	t 値	p 値
学年 (1年生)			
2年生	0.023	0.363	0.717
3年生	0.154	2.413	0.016
子どもと親しく接した機会 (なし)			
ほとんど毎日	0.043	0.698	0.486
ときどき	0.010	0.010	0.992
ほとんどない	-0.030	-0.455	0.650
子どもの世話への関心 (どちらともいえない)			
ある	0.261	3.905	0.000
ない	-0.030	-0.469	0.640
子どもの好き嫌い(嫌い)	0.051	0.718	0.473
弟の存在 (無)	0.037	0.641	0.522
妹の存在 (無)	0.080	1.390	0.166

( ) 内はレファレンスカテゴリ

として、3年生 ( $\beta = 0.147$ ,  $p = 0.026$ )、子どもの世話に関心がある ( $\beta = 0.135$ ,  $p = 0.052$ )、子どもと親しく接した機会がときどきあるもの ( $\beta = 0.125$ ,  $p = 0.071$ ) の3項目が抽出された(表5)。

## 4. 考 察

### 1) 学生がもつ子どものイメージ

因子分析の結果に基づいて求めた学生の子どもに対するイメージの第一因子は、子どものもつ生き生きとした気力や活気などの活発な側面をイメージしている項目で示されており、子どもが本来もっている感情や意欲を感覚的にとらえ、子どもの特性を肯定的にとらえている。第二因子は、子どものもつ資質や外観的な姿に関連している項目が示されている。これは本来の子どもの姿を把握する上で、学生が肯定的に子どもをイメージしている。第三因子は、子どものもつ勢いや

表5 「たくましさ」の下位尺度得点と関連要因による重回帰分析

要 因	標準化係数 $\beta$	t 値	p 値
学年 (1年生)			
2年生	0.081	1.219	0.224
3年生	0.147	2.236	0.026
子どもと親しく接した機会 (なし)			
ほとんど毎日	0.019	0.292	0.770
ときどき	0.125	1.810	0.071
ほとんどない	0.050	0.746	0.456
子どもの世話への関心 (どちらともいえない)			
ある	0.135	1.948	0.052
ない	-0.068	-1.029	0.305
子どもの好き嫌い(嫌い)	-0.008	-0.113	0.910
弟の存在 (無)	0.020	0.339	0.735
妹の存在 (無)	0.047	0.786	0.432

( ) 内はレファレンスカテゴリ

力強さに満ちている内面的イメージに関連している項目が示されており、子どもが成長していく姿や行動の理解を肯定的にとらえていると考えられる。これらのイメージ項目により抽出された因子は、子どもの外観によるものだけではなく、子どもの特性や内面的なところにも目が向けられている因子で構成されていた。また、子どもに対する3つのイメージ因子のうち、「生き生き」が最も高い得点であり、本学学生は子どもは活発で、意欲的で元気があり、おしゃべり好きで楽しそうなどの肯定的なイメージを持っていることがわかった。

3因子はいずれの得点も肯定的な側にあり、3者間には有意な差が認められた。これは、既報<sup>3)</sup>の調査結果とほぼ一致しており、今回の学生も子どもに対し肯定的なイメージを持っていることが明らかになった。

## 2) 子どもに対するイメージに及ぼす諸要因の影響

学年間における子どもイメージの影響において、「性質」および「たくましさ」について肯定的なイメージを高くもっているのは3年生であった。この理由として、3年生は保育園実習や小児病棟実習を通して、さまざまな発達段階にある子どもたちと接する機会を他学年より多くもっており、特に小児病棟実習では子どもと深く関わることで成長発達の特徴を理解し、内面的特性についても目が向けられ、個別的な側面をとらえている。しかし、3年生において「生き生き」に関するイメージが他の2因子より得点が低いのは、小児病棟実習で入院している子どもの病気による症状や苦痛などに対して、子どもが示す反応や病状、状態の変化に直面することなどが関係していると考えられる。これは、既報<sup>3)</sup>と同様の結果であった。また木村<sup>5)</sup>も、

病児との接触体験が子どもの動的な評価を低下させていることを報告している。

本報で明らかになった点は、子どもと親しく接した機会の頻度の影響では、ときどき接する学生で「たくましさ」のイメージにおいて肯定的イメージを持っていたことである。これは子どもと、ときどき接する体験のなかで、子どもの成長発達していく姿をたくましく、強い印象という極めて表面的なとらえ方をしているためと推察される。

さらに、子どもの世話への関心がある者は3因子すべてにおいて子どもイメージの肯定度が有意に高くなっていたといえる。

また、子どもが好きと答えた学生が86.6%いた。これは子どもとの接触体験の減少傾向が指摘されているなか、本学学生は子どもを肯定的に受け止めているものが多かったといえる。しかし、子どもが嫌い、どちらかという嫌いと答えた学生が、既報<sup>2)</sup>では4%、本報では6.4%の学生が存在し、わずかではあるが増加していた。また、河上<sup>6)</sup>の研究の結果では3.6%と報告されており、これを本学学生と比較すると2.8%多くの学生が苦手意識を抱いていた。これらの学生に対して、これから始まる小児看護学臨地実習において、子どもへの対応に困惑する状況や学習意欲に何らかの影響を与えることが予測される。そのために、講義では子どもを全体的にとらえることができるような内容の工夫を行うと共に、ロールプレイングを取り入れ、疑似体験を行うことは、子どもの世話への関心を持たせ、さらに苦手意識の克服やコミュニケーション能力を高めることができる有効な教育方法と考える。

臨地実習において教員や臨床指導者は、学生に対して子どもとの接し方のモデルを示し、子どもとの行動の意味づけをサポートすることが重要である。

## 5. ま と め

A短期大学看護科の1年生から3年生を対象として、子どもに対するイメージ調査を行った。

1) 既報<sup>3)</sup>と同様の結果になったものは以下の2点であった。

(1) 学生の抱く子どもイメージは因子分析の結果、3つの因子が抽出された。第一因子は「生き生き」に関するイメージ、第二因子は「性質」に関するイメージ、第三因子は「たくましさ」に関するイメージと解釈できる因子より構成され、3因子はいずれの得点も肯定的な側にあり、3者間には有意な差が認められた。

(2) 学年間における子どもイメージにおいては、「性質」と「たくましさ」について肯定的なイメージを高くもっているのは3年生であった。

2) 本報で明らかとなったものは以下の3点であった。

(1) 子どもと親しく接した機会の頻度の影響では、ときどき接する学生が「たくましさ」のイメージにおいて最も肯定的イメージを持っていた。

(2) 子どもの世話への関心のある学生ほど、3因子においても肯定的度合いが高かった。

(3) 子どもが嫌い、どちらかという嫌いと言った学生は6.4%存在し、苦手意識を抱いている学生に対して、ロールプレイングを取り入れ、疑似体験を行うことが有効な教育方法であると考えられた。

## 6. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました学生

の皆さんに深く感謝いたします。

## 7. 文 献

- 1) 厚生統計協会：国民衛生の動向, 厚生指標54(2)：38—39, 2007.
- 2) 谷原政江, 登喜玲子：看護科学生の子供に対するイメージとそれに影響する要因, 岡山県看護教育学集録：48—57, 1992.
- 3) 谷原政江, 登喜玲子, 中西啓子：看護科学生の子供に対するイメージとそれに影響する要因 — 第2報 —, 第24回日本看護学会集録 看護教育：160—162, 1993.
- 4) 岩下豊彦：SD法によるイメージの測定, 東京：川島書店, pp. 44—56, 1983.
- 5) 木村留美子：子ども観の研究(1) — SD法による短期大学生の子どものイメージについて —, 日本看護科学学会誌12(1)：50—56, 1992.
- 6) 河上智香, 藤原千恵子, 上野恵美子, 谷口佳生理：4年制看護系大学の学生が持つ子どもイメージの構造, 日本看護学会論文集, 看護教育34：103—105, 2003.

